

『諸国古城之図』所収「摂津真田丸」図の再検討

松尾 信裕

要旨 2016年NHK大河ドラマ特別展「真田丸」の図録に「真田丸について —「真田丸図」と構造の検討—」と題した論考を大澤研一学芸員と連名で執筆し、展覧会に出陳された真田丸図から推定される真田丸の位置と構造を提案した〔大澤・松尾2016〕。

そこでは内務省地理局測量課が明治19年（1886）に作製した『大阪実測図』を使い、そこに記載された字名を検討して各種真田丸図と照合させつつ真田丸跡を推定した。

今回は、真田丸の位置と構造を推定した『真田丸展図録』所収の論考をもう少し補おうと考え、今に伝わる近世の真田丸図に検討を加え、それらの図の特徴を改めて認識し、それらに描かれた特徴的地形を抽出し、それと近世大坂の町を描いた三郷町図と比較しながら、位置と構造を推定した。

その結果、いくつかの真田丸復元に参考にされる『諸国古城之図』所収の「摂津真田丸」図は、後世の地形改変を受けたもので、真田丸とは関係のない地形をも描いた図であると推定された。この図からは大坂の陣当時の真田丸の姿は復元できないと考えるに至った。

はじめに

平成27年4月29日から江戸東京博物館を皮切りに始まった、2016年NHK大河ドラマ特別展「真田丸」の図録（以下『真田丸展図録』とする）には、多くの真田丸図が掲載されている。

筆者もこの展示に関わった者として多くの真田丸図を詳細に観察する機会を得た。そして、その図録中に「真田丸について —「真田丸図」と構造の検討—」と題した論考を大澤研一学芸員と連名で執筆し、展覧会に出陳された真田丸図から推定される真田丸の位置と構造を提案した〔大澤・松尾2016〕。そこでは内務省地理局測量課が明治19年（1886）に作製した『大阪実測図』を使い、そこに記載された字名を検討して各種真田丸図と照合させつつ真田丸跡の位置と構造を推定した。

本稿は、真田丸の位置と構造を推定した『真田丸展図録』所収の論考で十分に提示していなかった各種真田丸図に検討を加え、それらの図の特徴を筆者の理解を加えて紹介する。さらに、『諸国古城之図』所収の「摂津真田丸」図については近世大坂の町を描いた大坂三郷町図と比較しながら、それに描かれた特徴的地形を抽出し、筆者の解釈に基づいて「摂津真田丸」図に描かれた「真田丸」の姿を推定してみる。

1. 真田丸を描いた各種真田丸図

大坂冬の陣の際に築かれた真田丸を描いた絵図は『真田丸展図録』に所収されているだけでも7点

ある。この中で大坂冬の陣配陣図と括られる図として『偃台武鑑』所収の図、大阪歴史博物館と徳川林政史研究所がそれぞれ所蔵する「大坂冬の陣配陣図」の3点がある。それらの内、大阪歴史博物館と徳川林政史研究所が所蔵する「大坂冬の陣配陣図」は大坂城を取り囲む徳川方の大名の軍勢の名前を記し、豊臣方が籠城する大坂城は、本丸二の丸を囲む惣構を描き、その南東部に半円形の真田丸を描いているもので、これに類似した絵図はこの2点以外に多数存在している。

これら大坂城全体の中に真田丸を描いた冬の陣配陣図以外に、真田丸だけを描いた図が4点ある。一つは「大坂真田丸加賀衆挿ル様子」と題した永青文庫所蔵の図（以下「永青文庫図」とする）で、既に北垣聰一郎によって紹介されていた〔北垣1982〕。二つ目は「大坂御陣真田丸之図」と題した前田育徳会尊経閣文庫の図（以下「尊経閣文庫図①」とする）である。これは新発見の真田丸図で、真田丸に対峙した加賀前田家に伝わったものである。三つ目も前田家に伝わった図で、「大坂冬役真田丸図」と題する図がある。前田育徳会尊経閣文庫所蔵の図で、真田丸展の大阪会場で初公開された図である（以下「尊経閣文庫図②」とする）。四つ目は浅野文庫の『諸国古城之図』所収の「摂津真田丸」である（以下「浅野文庫図」とする）。この図は近年、真田丸の跡地を実際に調査して描いた図として評価され、真田丸復元に利用されている。

この4点の図は、真田丸と惣構南堀を描いた図で、真田丸の位置や構造を復元する手掛かりになるものであるが、描かれた内容に大きな違いがある。まず、「永青文庫図」と「尊経閣文庫図①」は慶長19年（1614）12月頃の真田丸での、真田隊と徳川勢の対陣の様子を描いたもので、前田隊の目の前に築かれていた真田丸の姿を描いている。また、もう一つの尊経閣文庫に伝わる「尊経閣文庫図②」も元禄12年（1699）に慶長19年の大坂冬の陣に参戦した前田家の武将の記憶によって描かれたものである。

一方、『諸国古城之図』は広島藩の五代藩主浅野吉長の命によって作成が始まり、宝暦3年（1753）に完成したとする〔広島市文化財団広島城2014〕。吉長は宝永5年（1708）に家督を継ぎ、『諸国古城之図』が完成する前年の宝暦2年に没しており、『諸国古城之図』は宝永5年から宝暦3年までの間に編纂されたことになる。最も早く大坂冬の陣があった慶長19年（1614）から94年以上経った時に作られた絵図といえる。「永青文庫図」をはじめとする上記の3点の絵図と成立時期を比較した時、「浅野文庫図」を収める『諸国古城之図』はかなり遅れるものと言える。

このように『真田丸展図録』に掲載された7点でも大きく3種の真田丸図がある。以下では上記7点の絵図を3種に分けて記述を進める。

2. 冬の陣配陣図

『偃台武鑑』所収の「大坂冬の陣配陣図」、大阪歴史博物館および徳川林政史研究所所蔵の3点の冬の陣配陣図に描かれている真田丸は、円形を呈する水堀で囲まれている。冬の陣配陣図ではないが、浅野文庫『諸国古城之図』所収の「摂津大坂惣構」（図1）も同様の真田丸を描く。それらには城内と通じる通路と門があり、「大阪歴史博物館図」（図2）では南に1箇所、「徳川林政史研究所図」と『諸国古城之図』所収「摂津大坂惣構」では半円形の出丸の東西に外への出入口が描かれる。

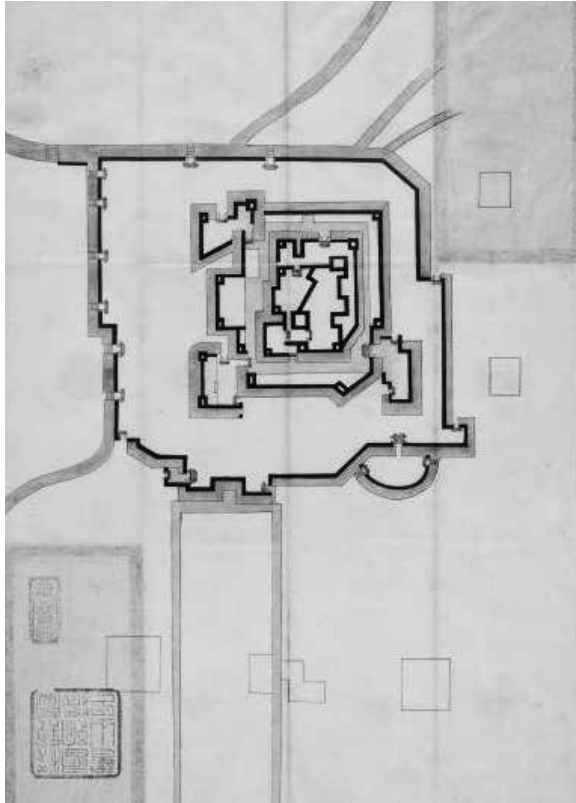


図1 浅野文庫『諸国古城之図』所収「摂津大坂惣構」
(広島市立中央図書館蔵)

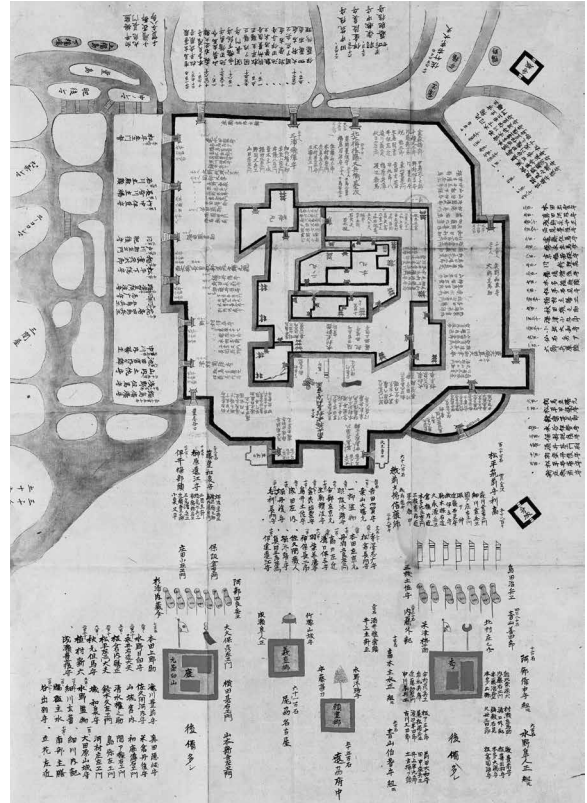


図2 「大坂冬の陣配陣図」(大阪歴史博物館蔵)

これらに共通するのは、大坂城の惣構の南東にあった虎口「平野口」の前面にあり、通路によって城内と繋がっているということである。惣構は秀吉存命の文禄3年（1594）に築かれた城壁で、真田丸が築かれた慶長19年（1614）よりも20年も前に築かれている。惣構南東の虎口は惣構工事によって建設されたと推定できる。となると、真田丸は単なる出城というだけでなく、この虎口「平野口」を守備するために築かれたともいえる。また、先の拙稿〔大澤・松尾2016〕では上本町筋の虎口であった「八丁目口」への横矢を効かせる曲輪とも解釈しており、自然地形に手を加えただけで非常に手薄であった大坂城南方東部の防御機能を高めるために設置されたと言えよう。

『偃台武鑑』所収の「大坂冬の陣配陣図」（図3）は上記の冬の陣配陣図とは異なり、仙台伊達家が「大坂冬の陣」に参戦した際の記録として作成されたもので、惣構に囲まれた大坂城と大坂城を包囲する徳川方の各大名家の配置と、南西方向から攻める伊達隊の布陣を描いている〔渡辺1981〕。

この図には惣構の南堀の東端付近に、柵と水堀で囲まれた出城のような真田丸が描かれている。これを見ると、真田丸が水堀とその西側に柵で囲った曲輪で構成されていることがわかる。水堀は西側が曲線状に描かれ、東側は直線で描かれている。水堀で囲まれた曲輪と柵で囲まれた曲輪を防御機能の効果で考えると、水堀で囲まれた曲輪が主たる曲輪で、西側の柵で囲まれた曲輪がそれに付属する曲輪、あるいは馬出の機能を持つ曲輪と考えられる。水堀で囲まれた曲輪は北側に城内へと通じる通路と門があり、大坂城の虎口を守るために、その前面に築かれた曲輪という性格もあったと考える。また、水堀で囲まれた曲輪の西面には、柵で囲まれた西側の曲輪へと通じる門があり、東側の直線になった堀の部分にも門が描かれている。柵で囲まれた曲輪には西側に出入口があるが、その構造は水

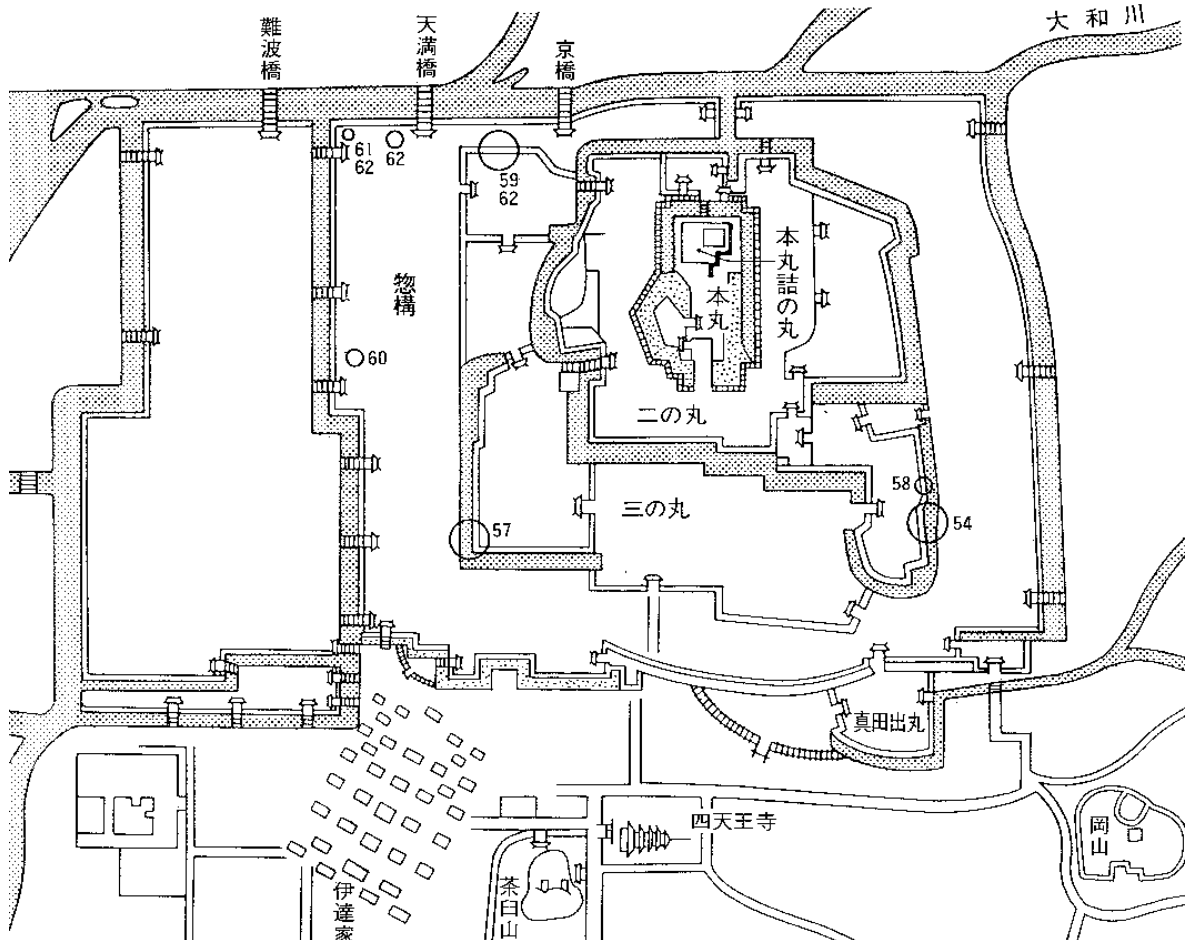


図3 『偃台武鑑』所収「大坂冬の陣配陣図」(〔藤井重夫1989〕より転載)

堀で囲まれた曲輪の門とは違い、屋根のない冠木門のように描かれており、柵で囲まれた曲輪が水堀で囲まれた曲輪よりも防御機能が低いように見てとれる。こうした観察からも、水堀で囲まれた曲輪が主郭と考えてよい。大坂城を南西方向から攻めた伊達隊は、真田丸が堀と柵で囲まれた二つの曲輪で構成されているように見たのだろう。

3. 対陣を記録した真田丸図

『真田丸展図録』には2点の真田丸を攻める徳川勢の布陣を描いた真田丸図と、その当時の惣構南堀と真田丸の位置を描いた図がある。

一つは「永青文庫図」(図4)で、先にも述べたように、北垣聰一郎によって紹介され、「冬の陣の合戦に直接参加した人物の手控えから、改めて作成された図」と推定されたものである〔北垣1982〕。紙面上部に城内側に大きく窪むように蛇行する大坂城惣構南堀と土堀を描き、南堀が窪んだ位置に真田丸が描かれる。惣構南堀がこのような形状に窪んでいる場所はないが、真田丸の西側はおおよそ絵図のような曲線となっており、真田丸の東側については本来北東方向に伸びているのをおぼろげな記憶で南東に延ばしたのであろうか。

惣構は城内側に丸と三角の狭間が交互に描かれた土堀があり、土堀の下部には犬走りのある土居が立ちはだかり、土居の下には堀が続く。堀は真田丸の位置で東西に途切れ、東側は水堀であるが、上

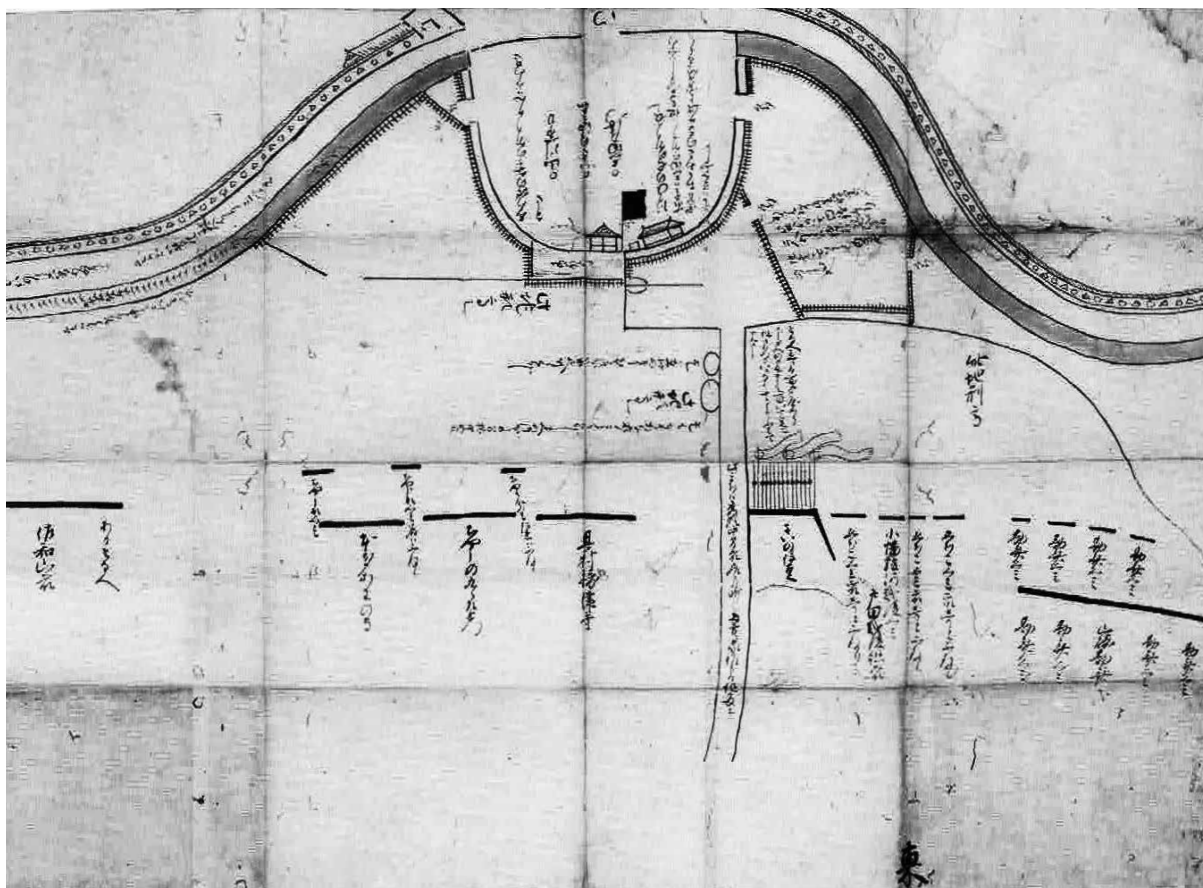


図4 「大坂真田丸加賀衆挿ル様子」(永青文庫蔵)

町台地が高くなる西側は真田丸の西側付近だけは水堀で、その西は空堀となっている。図では水堀の部分を青灰色で彩色し、空堀の部分は彩色せず短線を書き並べている。後述する「尊経閣文庫図①」ではこの部分に柵があると記載されている。

真田丸は大坂城内と繋がっていたようで、真田丸の北に「門」と記載がある。紙面がこの門の文字の間近で切断されており、門と通路の構造はわからない。ただ、真田丸西側にある惣構の土堀は真田丸の位置で途切れ、土堀よりも規模の大きい建物があるように描かれており、門の建物に続く施設が描かれていたのであろう。

真田丸の曲輪は中央の主郭が半円形に描かれ、柵と堀を描いているように見える。この描き方からは判断できないが、後述の「尊経閣文庫図①」では「土居」「カラ堀」との記載があることや、『大坂御陣山口休庵咄』では「玉造口御門之南、東八丁目之御門の東一段高き畑御座候を、三方ニから堀をほり、堀を一重かけ、堀の向とから堀の中と、堀きわニさくを三重ニ付、所々矢倉せいろうを上ケ、堀のうで木の通りニは、七尺の武者ばしりをいたし、父子の人数六千余人ニて籠申候、是を真田の出城と申候」とあり、堀と堀だけでなく三重の柵があったようだ。

曲輪の南部に黒旗と建物を2棟描く。建物の北には「山川帶刀 いぎの清兵衛 真田左衛門」の名が南を頭に書かれている。その東には「あかねの長のほり多シ 右是ハ真田のほり也 但馬しるしハくろ四方 チ、あわの守如此と聞及候間 よく是ハ覚申さず候」とあり、真田兵が詰めていたことがわかる。描かれている黒い旗は父真田昌幸の馬印を信繁も用いていたのであろう。山川帶刀の西には

「しろ地のながのぼり もんはくろきなた」とある。そして真田丸の前面には長方形の水堀が描かれる。

真田丸主郭の東西には外部との通路となる出入口があり、それを出たところには柵で囲まれた空間が広がる。真田丸主郭の馬出と言えるものだろう。東側の空間は広く、東西に出入口がある。西側の空間は狭いが、その外側に墨で線が引かれており、そこにも防御線となる施設があったのかもしれない。

真田丸を攻める徳川勢の布陣は真田丸の正面に前田隊が対峙し、西に「あかそなへ」「佐和山衆」がいる。この隊は井伊家である。前田隊が布陣する中央に真田丸の南端から南に延びる道路が描かれている。この道は冬の陣以前から存在していた道路で、現在の小橋寺町の南北道路と考えた〔大澤・松尾2016〕。しかし、その道路には寺町の記載はなく、「此ミちハ秀頼中間衆居たる町也 両方ニ家作たる組多シ」との記載があり、冬の陣時点では豊臣家の中間衆の屋敷が存在していたことになる。小橋寺町の寺院群はいずれも冬の陣以前の慶長17年よりも遡るとされている〔内田1985〕ので、この寺院開基年代と図中の中間衆の家が建ち並ぶという景観とは大きな隔たりがある。

道路の特定は今後の実地調査などで検討していくが、重要な点はこの道路が真田丸が築かれる前から存在していたことである。大坂城内には大坂城二の丸大手の前を通る上町筋という南北道路があるが、その道路から東西におおよそ250m間隔で南北道路が敷設されていたと推測している〔松尾2005〕。その推定では上町筋から約500m東にある南北道路も城内の基幹道路としており、その道路を南に延長して惣構に突き当たる場所に城内への虎口である「平野口」が推定できる。真田丸以南の南北道路は北へと延長すれば大坂城の虎口である「平野口」によって城内と繋がり、惣構堀を挟んで大坂城内の都市構造と一体になっていたと推定することができる。

真田丸の南方にはこの道路とその両側に布陣する前田隊の陣が配置される以外に、道路の右脇に「そなへ立たる所よりやくら下尺の木まで百八十足也 但御あつかい二なりてよりふみて見申候」との記載がある。先の〔大澤・松尾2016〕でも冬の陣の和睦がなった後に、前田家が真田丸一帯の実地検分を行っていることを明らかにしており、この図が前田隊最大の敗北を喫した敵方の陣地を客観的に描いた図と言える。

二つ目となる真田丸と徳川勢の布陣を描いた図が「尊経閣文庫図①」(図5)である。この図は新発見となる図で、真田丸を攻撃した徳川勢前田隊の記憶によって作成され、その後も前田家に伝わってきた図である。先の「永青文庫本」と異なる点は惣構の南面堀が、推定される惣構の姿と近似することで、西方から延びてきた惣構が北東方向に屈曲し、真田丸付近で再度東に折れている。

書き込まれている情報は「永青文庫図」とほぼ同じで、冬の陣和睦後に前田家が参陣した家中の武将から聞き取り調査を行ったということを裏付けるものであろう。真田丸内の武将の名前や馬印の黒い旗、幟の色や模様、主郭と城内を繋ぐ通路、惣構の土居や堀の構造、水堀の範囲もほぼ同じである。また、主郭の東西にある柵で囲った空間も同じである。ただ、柵の描き方が立体的で鳥瞰図のように描く。主郭と城内を繋ぐ通路に置かれた門や、主郭から柵で囲まれた空間への出入口にも門を立体的に描く。

先の「永青文庫図」とこの図の違いは真田丸主郭内の幟に赤の彩色や黒い鉦を図示していることや、城内との通路、主郭からの出入口を黄色で彩色している点、土居にも緑色の彩色がある。真田丸の空

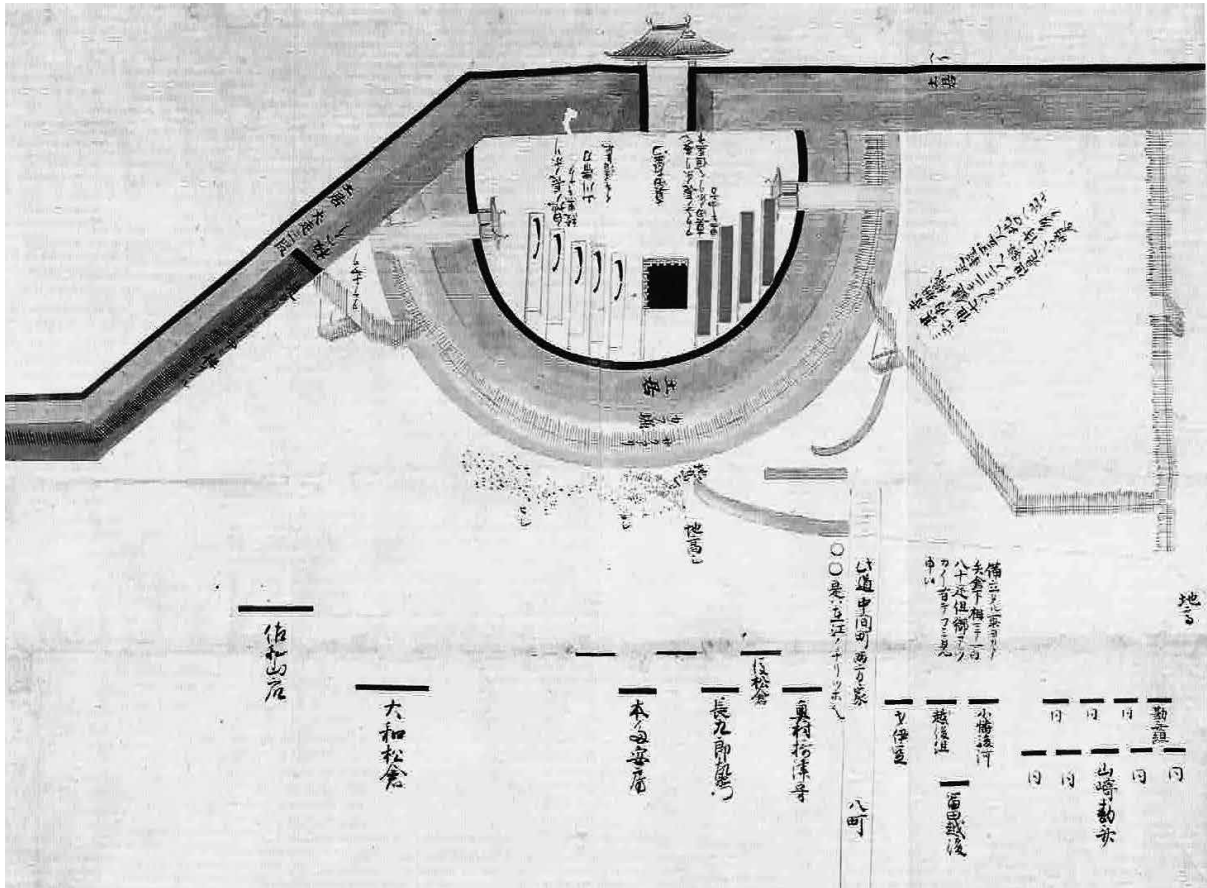


図5 「大坂御陣真田丸之図」(前田育徳会尊経閣文庫蔵 前田育徳会の許可なく画像の複製を禁止します。)

堀の前面には菱が撒かれていたとの記載もある。聞き取り調査で得られた情報を再整理して作図したものではないだろうか。

この図も真田丸で大敗を喫した前田家に伝わってきたもので、参陣していた前田家家中の武将の記憶から作成されたものと推測できる。まさに敗北した悔しさが織り込まれた図と言えるが、あくまでも客観的に描いている点が生々しさを滲ませている。そうした記憶を元に描かれた図であるため、ここには加飾はなく、実際に近い姿の真田丸が描かれていると想定できよう。

また、二つの図から言えることは、前田隊が真田丸の南方から攻撃しているということである。真田丸推定地の東端にある三光神社が、「宰相山」という字地であったことから、三光神社境内を加賀前田家の陣地であったとする説がある。江戸時代の寛政年間に刊行された『摂津名所図会』にも「世に真田山といふ 元和の頃 真田の壘ここにありしとぞ 社説には 宰相山といふ 加賀宰相侯の陣屋 此邊にありしより斯くいふなり」とあり、多くの研究者は真田丸の地を西側の高台である現在の明星学院校地と推定するかたわら、東に接するこの地を加賀前田家の陣地であったとする(註1)。

しかし、この二つの図や後述する『大阪実測図』では三光神社東側の低地には深田と推定できる低湿地が広がっていることから、[大澤・松尾2016]で提案したことではあるが、三光神社の地は真田丸主郭の東に設けられた柵で囲まれた空間との推定に立てば、東から前田隊が攻撃するとは考えにくい。さらに江戸時代寛文6～8年頃(1666～1668)に作成された大坂三郷町絵図では、小橋寺町南端の慶伝寺の南に「加賀築山跡」と記載する(図8)。同時期の大坂三郷町絵図にも「築山」と同じ位

置に記載がある。また、この西の八丁目東寺町南端にある宝樹寺の南にある伝光寺の境内には「越前築山」があったとする（註2）。『大阪実測図』でも伝光寺境内に「字築山」と記載がある。この二つの築山の位置を考えると、越前松平隊と同様、加賀前田隊も真田丸の南方から攻撃してきたと考えてよいのではないかな。

上記二つのような対陣図ではないが、大坂城惣構に接続した真田丸とそれを攻撃する前田隊の面々を文字で記載したものが「尊経閣文庫図②」である。この図は存在は知られていたが、公開されたのはこの展覧会が初めてである。この図は先の2点と比較すると至って簡素に描かれているが、真田丸の全景が半円形で、大坂城内と通路で繋がっていることを描いている。やはり、真田丸は半円形の出丸で、大坂城内と一体になっていると考えてよいであろう。この図は大坂冬の陣直後の慶長19年12月22日の年紀とともに、冬の陣での戦いで先祖の功績を記したもので、元禄12年（1699）に作成されたとの記載がある。この図の理解については〔大澤・松尾2016〕にも述べており、それを参照していただきたい。

4. 真田丸跡を調査した図

冬の陣直後の記憶を基に作成され、今に伝わってきた上記3点の真田丸図と違って、大坂冬の陣後、しばらく時を置いてその痕跡を求めて作成されたものが「浅野文庫図」（図6）である。

「浅野文庫図」を利用して真田丸を復元した坂井尚登は、「作成者が実際に現地に赴いて実測、作図していたことが確実」で「縄張りを描いた詳細図であると理解」されている〔坂井2015〕し、千田嘉博は「現地調査によって作成した現状図とみられるもので、極めて信頼性の高い「実地調査図」、あるいは「遺跡調査図」とも言うべき史料です。」〔千田嘉博2015〕と評価する。

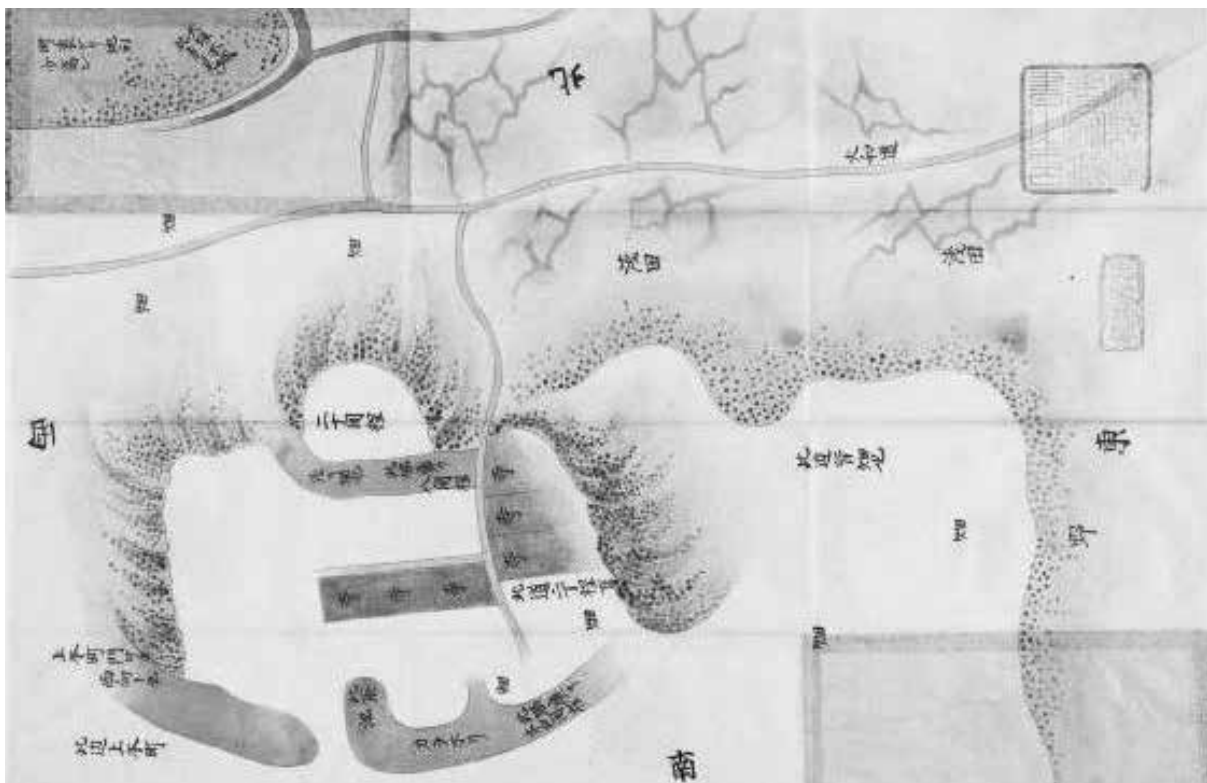


図6 浅野文庫『諸国古城之図』所収「摂津真田丸」（広島市立中央図書館蔵）

「浅野文庫図」はその印象として、城郭の縄張りとは程遠い姿を呈している。惣構の外に石垣（土塁か）と堀を備えた半円形の出城として描かれている浅野文庫『諸国古城之図』の「摂津大坂惣構」（図1）と比べると、その景観の違いは大きい。

この違いから、浅野文庫の真田丸図（「浅野文庫図」）が大坂の陣後、図が作成されるまでの間に被った堀の埋め戻しや土塁などの削平、地形の改変などの結果がそのまま図に描かれていると考える。まず、図に対する筆者なりの理解を示そう。

真田丸と想定される区画は他の場所よりも高くなっているようで、周囲は崖状の描き方となっている。また、その東に続く「此辺皆畑也」と記載した場所は真田丸想定地よりも低いようであるが、北側やその東側よりも高くなっている。真田丸の北には低地があり、「畑」や「浅田」が広がる中に東西方向の「大和道」がある。「大和道」からは北と南に通じる道路があり、北には高い所があるようで、崖状の描写と「町裏ナリ地形少高シ」との記載がある。「大和道」から北に伸びる道路はその崖を登って行くのであろう。

「大和道」から南に伸びた道路を上がっていくと、そこが真田丸の想定地である。南に伸びる道路を南に崖を登って行くと東側に寺院が並ぶ。そして南端の寺院から西へと延びる道路があり、その南側に寺院が並ぶ。この道路は西端の寺院の前で終わっている。

真田丸想定地はこれらの道路と寺院を取り込み、北端の崖と東西の崖、そして南側の「カラホリ」と記載がある堀状の窪みで囲まれた範囲であろう。想定地の北端には「二十間程」と記載された区画があり、その南端は「浅キ堀也 此堀廣サ八間程」と記載された堀状の窪みで囲まれる。これらが真田丸の中心部分として描写されている。作成者は北端の「二十間程」の区画とその南の、寺院を取り込んだ区画を真田丸の中心になる曲輪の跡地と解釈したのだろう。

真田丸想定地の西も崖のように描き、崖の南端には堀状の窪みが東南東に向かって延びる。その西端は窪みが無くなっているのか、彩色が薄くなり、「上本町門口ノ由 西向ト云」と記載がある。またその記載の南には「此边上本町」と記載する。江戸時代初期にはこの付近には八丁目東寺町など、豊臣期から存在した寺町があるはずであるがその描写はない。堀状の窪みの東端は灰色ではなく青く彩色されている。水でも溜まっていたのであろうか。

この堀状の窪みの東に、相対するように東西方向の「カラホリ」を描く。この「カラホリ」は「大和道」から南に伸びてきた南北道路の延長上に位置しており、南北道路に面する寺院の南端に「此道二丁程有」との記載がある。寺院の南端から2丁ほど南に「カラホリ」があった。「カラホリ」は西端に「此所池」とあり、西の堀状の窪みと同様に青く彩色する。「カラホリ」の東端には「此堀廣サ二十四間程」と記載し、次第に痕跡が見えなくなって、東の崖に続く。

崖と「カラホリ」や堀状の窪みで囲まれた空間を真田丸と解釈し、その東にある「此辺皆畑也」も含めて「浅野文庫図」の紙面いっぱいに描写されていることから、作成者は真田丸の中心部の曲輪と東側の「此辺皆畑也」とした空間を含めて真田丸と解釈したようだ。ただ、この「浅野文庫図」が最初に真田丸の跡地を巡検し、描いたものではなかった。

平成28年（2016）7月13日の新聞各紙は島根県松江市の松江歴史館で新たな真田丸図が発見された

と報道した(図7)。その図は彩色の色調や崖の描写に違いはあるが、描く範囲、描かれた地形や道路、寺院の数、堀状の窪み、堀状窪みの先端を青く彩色するなど、一見して同じ系統上にある図と考えられる。この「松江歴史館図」は編纂年代を示すと思われる元禄(1688~1704)の文字のある城郭図集に収められているようで、「浅野文庫図」を収める『諸国古城之図』の完成よりも遡ることになる。

「松江歴史館図」と「浅野文庫図」との違いは、中心部の曲輪の北端にある「松江歴史館図」で「出丸 二十五間程」と記載のある区画を、「浅野文庫図」では「二十間程」と記載しており、広さが狭くなっている。また、「松江歴史館図」の作成者はここを「出丸」と認識しており、南の広い部分を主郭と認識したようだ。「松江歴史館図」には「出丸」の西側に崖を登る道があるが、「浅野文庫図」には描かれていないし、「出丸」の東には崖の途中に平坦地が描かれているが、これも「浅野文庫図」には描かれていない。ただ、「惣構堀」との記載がある南東側の堀状窪みやその西に相對する堀状の窪みはその形状もまったく同じで、大きな変化はなかったようだ。

「浅野文庫図」が「松江歴史館図」をそのまま写したものではないことは、違う地形を描いていることや新たな追記が認められることで明らかである。ただ、描写範囲が同じであることや描写する対象物が同じであることから、「浅野文庫図」の作成にあって、先に作成されていたこうした図面を参考にしていることが推測できる。

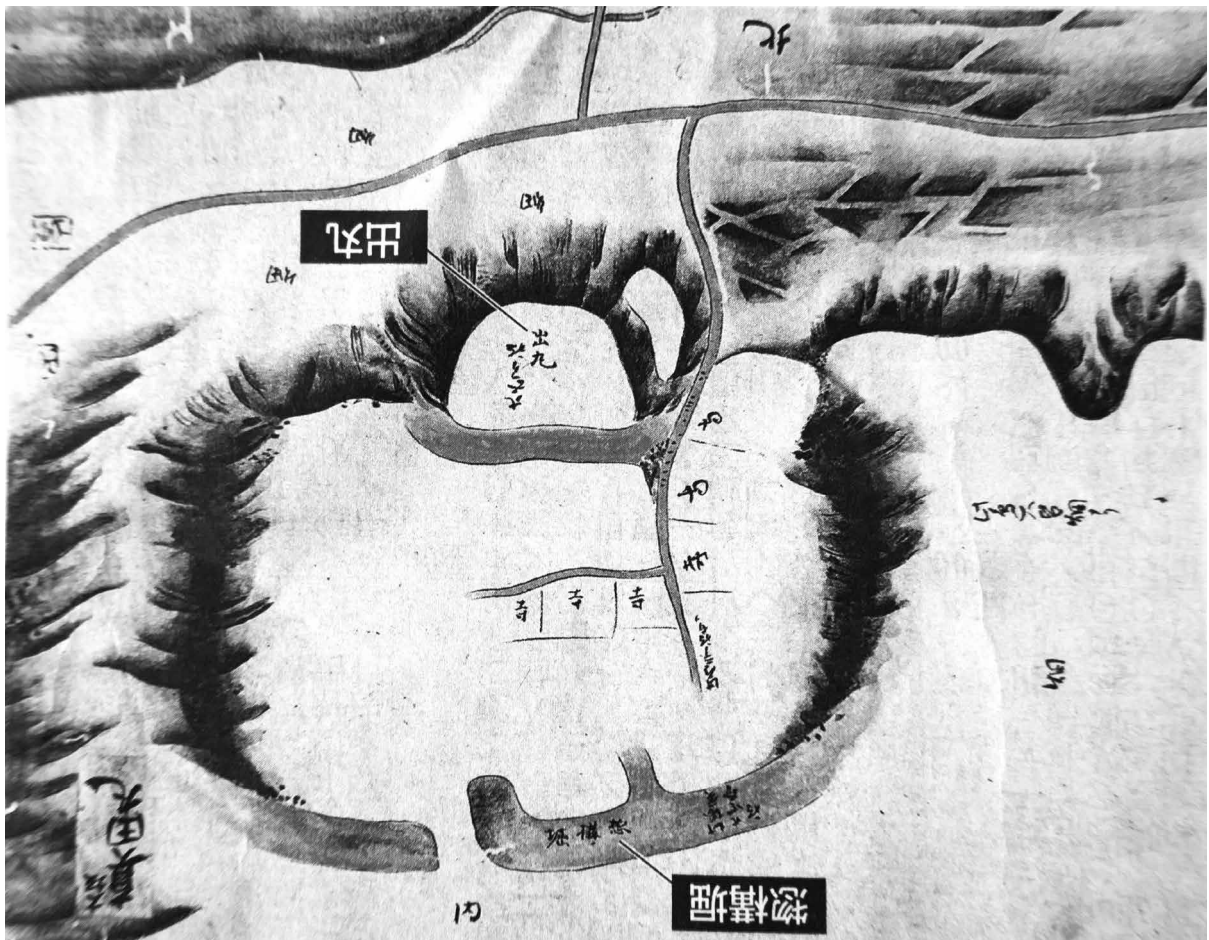


図7 松江歴史館蔵「大坂真田丸」読売新聞7月13日付朝刊記事「真田丸 大坂城から独立か」より転載

5. 近世初頭の大坂町絵図から復元する真田丸

「浅野文庫図」に描かれている真田丸はどこまで復元に利用できるのでしょうか。前節で「浅野文庫図」や新出の「松江歴史館図」は、大坂の陣後の壊平を受けた後に描かれた図で、大坂の陣当時の姿が描かれているとは考えにくいとした。「松江歴史館図」も作成時期は17世紀末で、「浅野文庫図」は18世紀前半となる。両図が描かれた時期には真田丸想定地の南に、両図に描かれた破壊されたような堀状地形が存在していたのである。それでは坂井や千田が餌差町南端付近にあったと推定する堀状地形は「浅野文庫図」作成後に地中に埋もれてしまったのであろうか。

否、それは近代まで残っていた地形だと考えている。では、どこを描いたものなのであろうか。この問いに答えられるものが17世紀後半に作成された近世初頭の大坂三郷町絵図である。大阪歴史博物館が所蔵する大坂三郷町絵図に「寛文6～8年（1666～1668）」（図8）、「貞享元年（1684）」（図9）、「貞享元年～4年（1684～1687）」（図10）に作成された図がある。これを見ると、「浅野文庫図」にある地形とよく似た地形が描かれている。

三郷町絵図には「真田丸跡」と記載されており、真田丸の位置がはっきり認識できる。そしてその北側と東側に崖状の描写があることによって、真田丸跡が高台であることがわかり、そこに北の谷地形から南北方向の道路が続いている。そして南北道路に面して寺院群が建ち並ぶ。崖状地形の北の谷地形には東西方向の道路がある。「浅野文庫図」や「松江歴史館図」と同じ道路の配置である。

東側にある崖状描写の南端から西に向かって、「浅野文庫図」の「カラホリ」のように「池」が描かれる。また、東の「池」の西に相對する地点にも円形の「池」がある。三郷町絵図では西側には八丁目東寺町から八丁目寺町にかけての寺院群が描かれてい

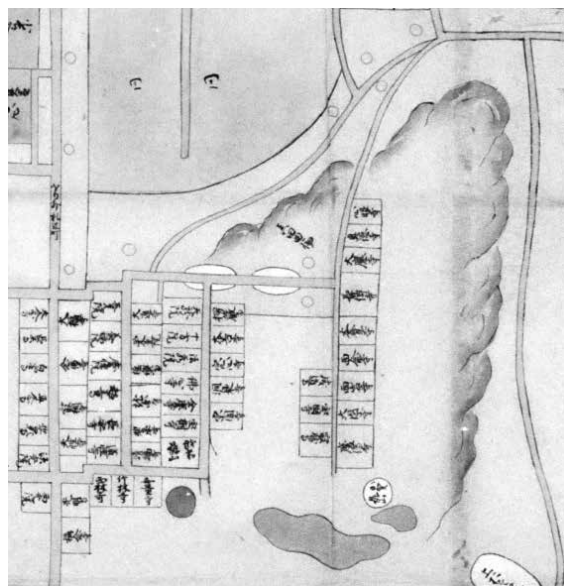


図8 「大坂三郷町絵図」(寛文6～8年)
部分 大阪歴史博物館蔵

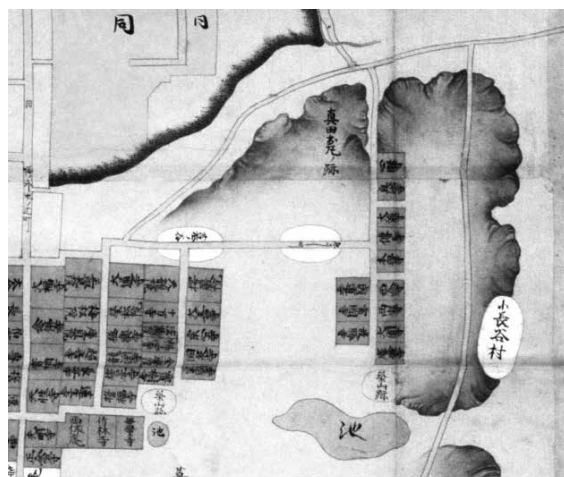


図9 「大坂三郷町絵図」(貞享元年)
部分 大阪歴史博物館蔵

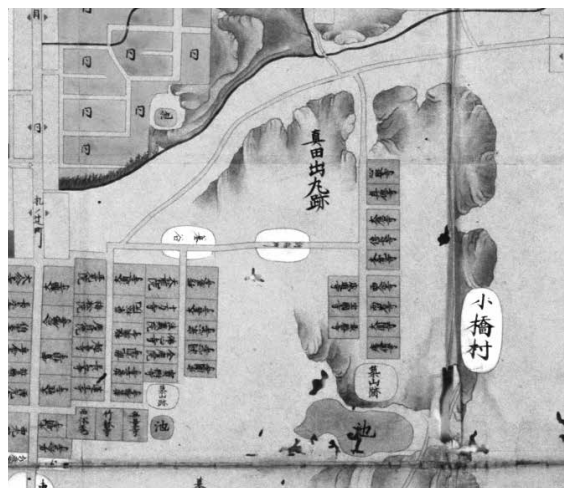


図10 「大坂三郷町絵図」(貞享元～4年)
部分 大阪歴史博物館蔵

るので、「浅野文庫図」のような崖状の描写はない。これら特徴的な地形に囲まれて寺院が存在するのは「浅野文庫図」と同じであるが、東西方向の道路には寺院が描かれていない。寺院は小橋寺町にだけ描かれている。

大坂三郷町絵図に接して「浅野文庫図」に描写された特徴的な地形を見てみると、三郷町絵図の中から「浅野文庫図」や「松江歴史館図」が生み出されたのではないかと考えた。ここに掲げた3葉の三郷町絵図はいずれも「浅野文庫図」や「松江歴史館図」より早く作成されたもので、両図が作成された時にはすでに存在している。

推測で話を進めるのも良くないが、元禄期の「松江歴史館図」を作成する時点で、その作者は大坂三郷町絵図を見ることができている。この作者がどこ出身の人物か知らないが、大坂に来て真田丸図を描くにあたって、大坂の人に真田丸の故地を尋ね、既存の三郷町絵図を参考に巡検し、その周囲にある城郭の堀と認識できるような地形を描いたのが「真田丸図」ではないのだろうか。また、「浅野文庫図」の作者も同様に既存の「松江歴史館図」や三郷町絵図を参考に作成したのではないかと考えてしまうのである。

こうした推測に立てば「松江歴史館図」や「浅野文庫図」に描かれた堀状の地形のうち、東側の「カラホリ」や「惣構堀」は今ではなくなった味原池であり、その西に相對する堀状地形は、八丁目東寺

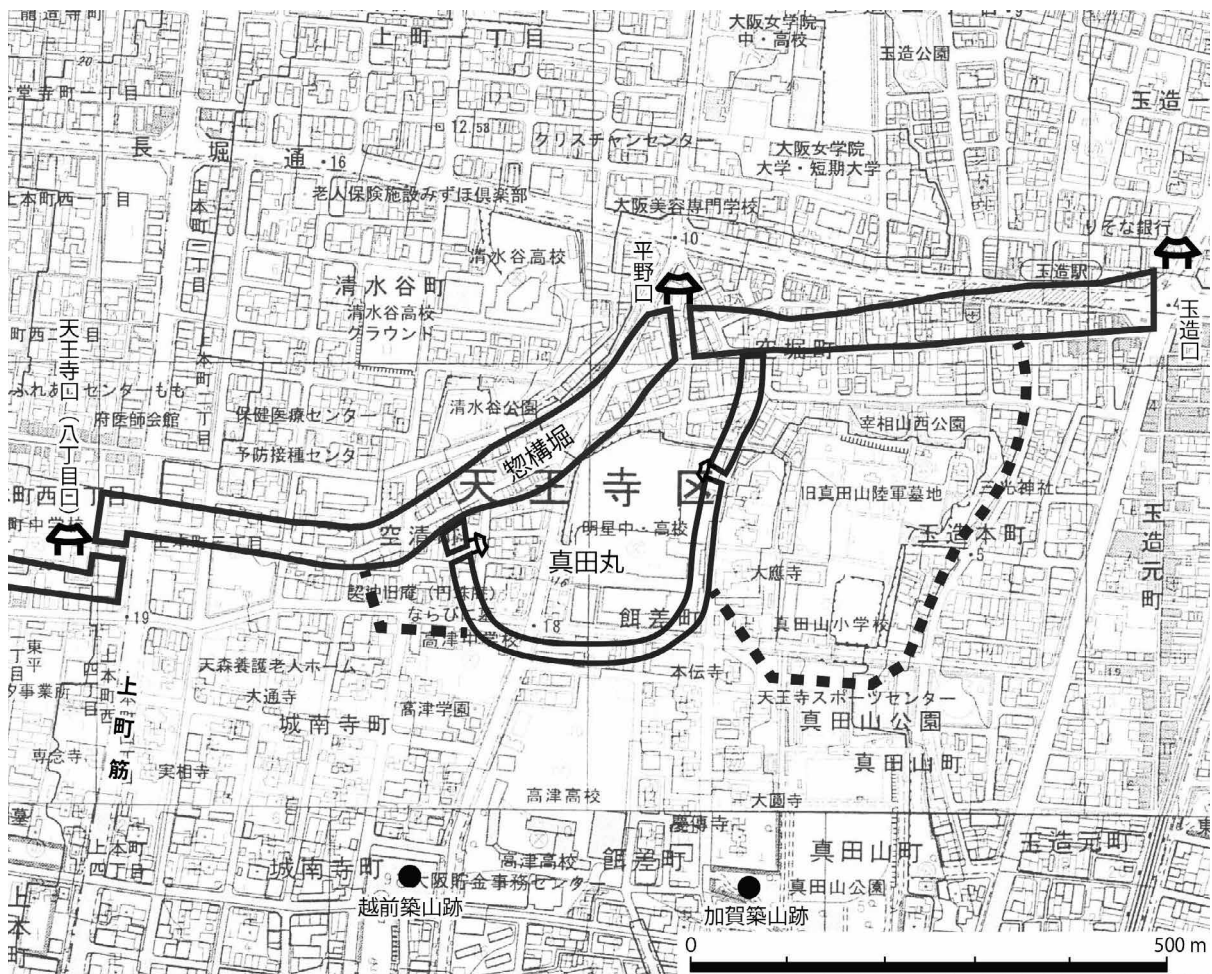


図11 真田丸推定図

町の南にあった越前築山を築いた時の土取り穴であろう。真田丸想定地に南北に並ぶ寺院から二丁ほどさきに堀があるとされているが、ほぼ近い距離感である。真田丸想定地の東にある「此辺皆畑也」と記載される空間は、現在の陸軍墓地や三光神社を含む一帯なのであろう。作成者はその辺りまでが真田丸と考えていたのである。この推測が成り立てば、「浅野文庫図」や「松江歴史館図」は真田丸の姿を描いたものと言うことはできないし、この図から真田丸の姿を復元することは出来ないことになる。

真田信繁が立て籠もった真田丸の復元については、先の『真田丸展図録』で述べたので再述はしないが、その位置図を再掲載する（図11）。復元にあたっては、「大阪歴史博物館図」「徳川林政史研究所図」浅野文庫「摂津大坂惣構」や「永青文庫図」「尊経閣文庫図①」「尊経閣文庫図②」にあるように、半円形の曲輪であったと考えるのが妥当であろう。これら以外の大坂冬の陣配陣図にも惣構堀の南に半円形の真田丸が描かれており、それが当時の真田丸に対する理解ではなかったか。そしてその位置は、はからずも〔坂井2015〕・〔千田2015〕・〔大澤・松尾2016〕や積山洋〔積山2016〕による復元案全てが指摘するように、明星学園構内を中心とした一帯であろう。

註

- 1、〔岡本1970〕・〔高田2008〕・〔坂井2015〕・〔千田2015〕などで加賀前田家の陣とする。
- 2、『新修大阪市史』史料編第5巻大坂城編に所収されている「石山要録」に以下の記述がある。「越前築山ハ今ノ伝光寺本堂ノ所ト云、南ノ方之池ハ築山ノ土取タル跡也ト云、築山三ヶ所、一所者伝光寺境内、一所者小橋東寺町南ノ端、慶伝寺ノ南ノ方、是加賀ノツキ山跡、一所者玉造大和橋東ノ方、佐和山之築山アト也」

参考文献

- 内田九州男1985、「城下町大坂」『日本名城集成 大坂城』小学館
- 大阪市2006、『新修大阪市史』史料編第5巻大坂城編
- 大阪文化財研究所・大阪歴史博物館2014、『大阪上町台地の総合的研究 ―東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型―』平成21～25年度（独）日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）
- 大澤研一・松尾信裕2016、「真田丸について―「真田丸図」と構造の検討―」『2016年NHK大河ドラマ特別展「真田丸」』NHK・NHKプロモーション
- 岡本良一1970、『大坂城』
- 北垣聰一郎1982、「豊臣時代大坂城「本丸図」と「真田丸」について」『日本城郭史研究叢書』第8巻 大坂城の諸研究 名著出版
- 坂井尚登2015、「大坂城真田丸―絵図・地形図・空中写真によって考察する位置と形状―」『城郭史研究』第34号
- 積山洋2016、「真田出丸の復元」『葦火』183号（公財）大阪市博物館協会大阪文化財研究所
- 千田嘉博2015、『真田丸の謎 戦国時代を「城」で読み解く』NHK出版新書474
- 高田徹2008、「豊臣期大坂城外郭に関する一考察」『戦乱の空間』第7号
- 広島市文化財団広島城2014、『浅野文庫諸国古城之図の世界』
- 松尾信裕2005、「豊臣期大坂城下町の成立と展開」『ヒストリア』193号
- 渡辺武1981、「豊臣時代大坂城の三の丸と惣構について―『偃台武鑑』所収「大坂冬の陣配陣図」を中心に―」大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第7 論考編

Reexamination of the "Settu-Sanada-maru" Figure in the Picture Map, "Shokoku-kojo-no-zu"

MATSUO Nobuhiro

I add examination to an illustration of some Sanada-maru drawn in the Edo era to estimate a position and structure of the Sanada-maru and confirm the characteristic of those figures.

I extracted the characteristic topography drawn on the figure and estimated a position and structure to be it in comparison with Osaka Sango-machi figure.

As a result, the "Settsu Sanada-maru " figure put in "Shokoku-kojou-no-zu" referred to for the Sanada-maru reconstruction received the topography modification of coming ages, and estimated it when it was the figure where I described the topography which had nothing to do with the Sanad-maru in.

I thought that the figure of the Sanada-maru at the time of the Osaka-Winter-War could not be restored to the original state from this figure.